

第4部会

の断絶があるためネオペンテコスタリズムとして前の二つと区分される。

一九八〇年代半ば以降、ブラジルから日本へのデカセギ労働者が増加した。一九九〇年には入管法が改正されて労働者の人口移動が加速化し、現在では在日ブラジル人は三十万人を超えるとみられる。彼らの宗教活動を眺めると、一九九三年ごろから日本産ブラジル系プロテスタント教会を自主的に誕生させていることが特筆できる。それらのほとんどがデカセギで来日した一般信者や元牧師が小規模な活動を積み重ねることで創設に至っており、教団の特徴では第一と第二の波を踏襲している。一方、第三の波であるブラジル産ネオペンテコスタリズムは教団の組織力によって戦略的な規模の布教を展開させている。

ここで注目するのがユニバーサル教会 (Igreja Universal do Reino de Deus) である。

同教団は一九七七年にリオデジャネイロで活動を開始し、短期間でブラジルのペンテコスタリズムでは第三番目の大教団に成長した。教義、儀礼、財産の規模、政治参加、他宗教に対する戦闘的な態度、メディアの活発な活用など、従来のペンテコスタリズムの教団と非常に異なる特徴をもっている。日本では一九九五年に活動を開始。一九九六年にはタブロイド版の月間新聞(ポルトガル語と日本語)を発刊。希望者にはブラジルで放送されている教団番組の録画テープを無料で配布するなど、ブラジルからの投資をもとに組織的な布教を展開していることが伺える。現在、日本での拠点教会をJR浜松駅前の一等地に置き、国内に二〇カ所の教会を開いている。

ユニバーサル教会のブラジルでの主たる宣教方法はテレビ伝道である。同教団は一九八九年にブラジルで第五位のテレビネットワーク・ヘコルジを買収した。同社は日本に二つあるブラジル系衛星放送局の一つを買収し、日本でもブラジル同様の宣教番組を報道している。番組の内容は、日本の信者の証言と牧師によるインタビュー、ブラジルで作成された救済体験の再現ドラマ、というようにブラジルでの宣教方法に変わりはなく。しかし、ブラジルと異なるのは、他宗教に対して批判的態度を取らないということだろう。番組では牧師が「私の教会では宗教に関係なく救いが得られる」というメッセージを発している。集会ではカトリック信者だという参加者もみられ、同教団が日本での新たな宣教方法を模索している状況が確認できる。

田中輝義の意識論

寺尾 寿 芳

本稿では仏教ことに『大乘起信論』をはじめとする大乘仏教の意識論に大きな影響を受け、教義以前のキリスト者の生存を独自に思索し、インカルチュレーションの新次元を模索したカトリック司祭田中輝義の思想を、ことに意識論に焦点を当てて概観したい。

田中輝義の思想はカルメル会士らしく、カルメル会改革派の神秘的靈性に強く影響されつつも、キリスト教信仰の日本における受容に関しては形式的な適用に留まらない、日本の風土文

化に根ざした深い受容を強く望むものである。西洋神学の受け売りで日本人の魂の深層に根ざさない日本神学の現状が厳しく批判される。その際、田中は思索の原動力を仏教の古典から直接くみ出そうとし、献愛に通じる慈悲を核とする浄土教を高く評価する。

注目すべきは田中の内面志向であり、それは彼の思想全体を貫く柱である。そこでは死がキリストの「空無化」にあやかっただ道であり、かつ生存の現場に留まりつつ想起されるべき内面的領域つまり死域として意味を顕わにする。その自覚過程で意識論が浮上する。

まず田中によれば、神も人間も徹底して他者を受容した間主體的な連帯性のうえに立脚しているとされる。人は「わたし」ではなく「わたしたち」という複数形をとるが、そこではペルソナが母親と乳児との原関係に見られるような「向かい合っている」存在」として理解される。また人間存在は本来的に「偶然者」であり、「創造主という縁」によって連带的に存在する「未完結の存在」である。しかもこの連帯性は呼応的に「我・汝・我々」と表現される内在内住する聖三位の神によって支えられる。ことに聖霊に相当する第三位の「我々」が重要である。人は意識の最深層で神と自己を透明な次元で霊的に重合させる。

意識は表層、中間層、深層の三層に分けられるが、唯識仏教の瞑想実践から明暗の逆転が説かれる。表層意識での分節化・差別化は迷いの相であるゆえに「暗」であり、深層ではさらなる最深層の阿頼耶識を通して「いのちの根源」が差し込んでく

るため「明」である。この深層への降下は、夢すらみない最熟睡時に脳幹で根源的生命が出入りすることにより先取りされる。しかもこの深層では我々が端的に成就するため個性が消え、集合的共同的な信仰が成就するとされる。日常においてこの根源性を自覚するには、価値理解の指標として真・善・美の徳目が有益とされ、ことに美が「存在の光輝（あるべき以上のあり方）」を示すゆえに重視される。この美意識は「清め」という日本文化と親密な関係を形成し、恥の文化に結実する。

「罪は創造主の御前にあるべきあり方」への逆行であり、恥は「あるべきあり方」と「あるべき以上のあり方」への逆行まで包括している」と主張されるのである。残念ながら、この恥への気づきは田中においてもこれ以上の進展を見せなかった。恥をめぐる意識の動きと田中の中間層理解との共通性を考察し、いわば夢見る形で社会の深層に集合的共同的にうごめく難問と取り組む道を探求しなくてはならない。

ここで筆者永年の研究課題である「死者の尊厳」とも関連して、「死者は生者に優り、生者を導く存在である」と発想してみよう。田中の意識論における中間層でも、そこでの分節的映像群は死域から射し込むいのちの光に照らされており、覚醒後は想起による遅延を伴うものの、その残像において、死を価値理解のみならず存在としてすでに体現した死者からの導きを解釈的に読みとることができる。その力動性には、表層への上昇という「劣化」にもかかわらず、そのイマージュを理性の域へと送り届けようという神の愛あるいは根源的生命からの願が込められている。ここで外在的なキリスト教的知見体系によって

第4部会

適度に援けられつつ、田中による中間層の意識論をさらに深めることは、和解に根ざす霊的平和論を基礎付け、さらにインカルチュレーションの意識論的次元を開示しえるだろう。

新渡戸稲造と国際交流

森 上 優 子

新渡戸稲造（一八六二—一九三三）は、近代日本を代表するキリスト者であり、また国際交流活動に尽力した人物として広く知られている。彼は、大学入学時に行われた面接の際、「日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度い」とその抱負を述べ、それ以来「太平洋の橋」となっており、積極的に国際交流活動を展開した。本発表では、この活動を支えた思想を考えてみたい。

新渡戸が行った国際交流活動は、欧米を中心として行われたことが特色のひとつとして挙げられる。彼は、幼少期から青年期にかけて、学校教育などを通じて異文化である西洋と出会う機会に恵まれ、日本人としての自覚を深めていったと思われる。新渡戸は『武士道』の執筆動機を「人間に東西の区別はない」ことを主張しようとしたと述べるが、これは、西洋が東洋を劣等視するような当時の現状を打開しようとする意識の現れであったと言えるであろう。

新渡戸は、西洋と東洋との間に共通する項として「人間」を打ち立てる。「西洋人も人ならば、日本人も人である。人とし

ての共通点があり得るならば、東西の差異を論ずると同時に、またその共通点をも大いに記憶してゐなければならぬと思ふのである」（『西洋の事情と思想』）。このように新渡戸は「共通点」を主張することを繰り返すが、その根底には人間の心に「内的制裁」とされる「内部の矩」が存在するという確信があった。新渡戸は、その「内部の矩」の例として「各自の心の中に存する一種の声、孟子の云ふ是非の心、陽明学者の云ふ良知、ソクラテスの教へた「デイモン」（自由国民の底力）を挙げ、「自己以上の偉大なる權威を有するもの」とした。この「内部の矩」こそ東西の区別なく、老若男女の別なく、万人に備わるものと理解されたのである。心に価値を見出した新渡戸は、「内部の矩」を認識することにより、日本人は日本人という枠にとどまる存在から脱して、「世界共通の人類の一員」（『西洋の事情と思想』）となる、つまり、日本が西洋に比肩する存在へと引き上げられると考えた。

『西洋の事情と思想』のなかで、新渡戸は、日本人の性質として「理論に走る」、「コンミュナル、共存性」が発達している、「直観的な心的能力を持つ」という点を挙げている。そして同時に、西洋人の性質とする「プラクチカル」と「内部の矩」を重視することによる「自己尊重」に学ぶ必要性を主張し、日本の変革を語る。「日本の長所はあくまでも拡張するが、短所と思はれるところは、どしどし外国の長を採つて補ふやうに心がけたい」（『西洋の事情と思想』）というように、新渡戸は、日本人に対して自己の長所に他者の長所を加え、自己改造を行い続けていくことを要請した。この「内部の矩」を重視し